伊豫の介といひしは故院隠れさせたまひて又の年、常陸になりて下りしかばかの帚木もいざなはれにけり。須磨の御旅居もはるかに聞きて、人知れず思ひやり聞えぬにしもあらざりしかど、傳へ聞ゆべきよすがだになくて、筑波ねの山を吹き越す風もうきたるこゝちしていさゝかの傳へだになくて年月重りにけり。限れることもなかりし御旅居なれど京にかへり住みたまひて又の年の秋ぞ常陸はのぼりける。關入る日しもこの殿、石山に御願果しに詣でたまひけり。京よりかの、紀伊の守など言ひし子共、迎へにきたる人々、この殿かく詣でたまふべしと告げければ、道の程騒しかりなむものぞとてまだ曉より急ぎけるを、女車多く所せう搖ぎくるに日たけぬ。うちいでの濱くる程に、殿は粟田山越えたまひぬとて御前の人々道もさりあへずき込みぬれば、關山に皆下り居てこゝかしこの杉の下に車どもかき下し、木隠れに居かしこまりて過ぐし奉る。車など片は後らかし、先に立てなどしたれどなほ類廣く見ゆ。車十ばかりぞ袖口、物の色合ひなども漏り出でて見えたる。田舍びず由ありて齋宮の御下りなにぞやうの折の物見車おぼし出でらる。殿もかく世に榮え出でたまふ珍しさに數もなき御前ども皆、目とゞめたり。九月晦なれば紅葉の色々こきまぜ、霜枯れの草むら〳〵をかしう見え渡るに、關屋よりさと崩れ出でたる旅姿どもの色々の襖の付き〴〵しき縫ひ物、貫染の姿もさる方にをかしう見ゆ。御車は簾下したまひて、かの昔の小君、今右衞門の佐なるを召し寄せて、今日の御關迎はえ思ひ捨てたまはじなどのたまふ。御心の内いとあはれにおぼし出づること多かれど大ざうにて益なし。女も人知れず昔のこと忘れねば取り返して物あはれなり。

行くとくとせきとめ難き涙をや絶えぬし水と人は見るらむ

得知りたまはじかしと思ふにいと益なし。石山より出でたまふ御迎に右衛門の佐参りてぞまかり過ぎしかしこまりなど申す。昔、童にていとむつましう勞たきものにしたまひしかば、冠など得しまでこの御徳に隠れたりしを、覺えぬ世の騒ぎありしころ物の聞えにはゞかりて常陸に下りしをぞすこし心置きて年ごろはおぼしけれど色にも出したまはず、昔のやうにこそあらねどなほ親しき家人の内にはかぞへたまひけり。紀伊の守と言ひしも今は河内の守にぞなりにける。その弟の右近の將監解けて御友に下りしをぞ取り分きてなし出でたまひければそれにぞ誰も思ひ知りて、などてすこしも世に從ふ心をつかひけむなど思ひ出でける。佐召し寄せて御消息あり。今はおぼし忘れぬべきことを、心長くもおはするかなと思ひ居たり。

一日は契り知られしを、さはおぼし知りけむや。

わくらばに行き會ふ道をたのみしもなほ益なしや　しほならぬうみ

關守のさもうらやましく目覺ましかりしかな。

とあり。「年ごろのと絶えも初々しくなりにけれど心にはいつとなくたゞ今のこゝちする習ひになむ。すきぐしう、いとゞ憎まれむや」とてたまへればかたじけなくて持て行きて「なほ聞えたまへ。昔にはすこしおぼしのくことあらむと思ひたまふるに同じやうなる御心の懷かし

さなむいとゞ有り難き。すさび事ぞ用なきことと思へど得こそすくよかに聞え返さね。女にては負け聞えたまへらむに罪許されぬべし」など言ふ。今はましていと恥づかしう、萬のこと初々しきこゝちすれど、珍しきにや得忍ばれざりけむ

會坂の關やいかなる關なればしげき投げ木の中を分くらむ

夢のやうになむ

と聞えたり。あはれもつらさも忘れぬ節とおぼし置かれたる人なれば折々はなほのたまひ動かしけり。かゝる程にこの常陸の守、老いの積りにや惱ましくのみして物心細かりければ子共にたゞこの君の御ことをのみ言ひ置きて、萬のことたゞこの御心にのみ任せて在りつる世にかはらで仕うまつれとのみ明け暮れ言ひけり。女君、心うき宿世ありてこの人にさへ後れていかなる姿にはふれ惑ふべきにかあらむと思ひなげきたまふを見るに「壽の限りあるものなれば、惜みとゞむべき方もなし。いかでかこの人の御ために殘し置く魂もがな。わが子共の心も知らぬを」と後めたう悲しきことに言ひ思へど、心に得とゞめぬものにてうせぬ。しばしこそさのたまひしものをなど情作れど、上べこそあれつらきこと多かり。とあるもかゝるも世の理りなれば身一つのうきことにてなげき明かし暮らす。たゞこの河内の守のみぞ昔よりすき心ありてすこし情がりける。「あはれにのたまひ置きし、數ならずともおぼし疎までのたまはせよ」など追從し寄りていとあさましき心の見えければ、うき宿世ある身にてかく生きとま

りて終々(はてく)は珍しきことどもを聞き添ふるかなと人知れず思ひ知りて、人に、さなむとも知らせで尼になりにけり。在る人々、言ふ益(かひ)なしと思ひなげく。守(かみ)もいとつらう「己をいとひたまふ程に。殘りの御歯(よはひ)は多く物したまふらむ、いかでか過ぐしたまふべき」などぞ「あいなのさかしらや」などぞはべるめる。